

# 横井小楠と坂本龍馬

—その共通性と異質性—

北 野 雄 士

Yokoi Shōnan und Sakamoto Ryōma :  
Ihre Gemeinsamkeiten und Unterschiede

KITANO Yuji

キーワード：横井小楠, 坂本龍馬, 日本の独立, 国論の統一, 大政奉還, 武力討幕

## Abstract

Yokoi Shōnan (1809–1869) und Sakamoto Ryōma (1835–1867) stammten aus der Samurai-Klasse und waren sogenannte „Shishi“, eifrige Patrioten am Ende der Tokugawa Zeit. Fast sein ganzes Leben lang blieb Shōnan ein Samurai des „Higo-han“. Als Ryōma achtundzwanzig Jahre alt war, flüchtete er aus dem „Tosa-han“. Daher konnte Ryōma freierundaktiver als Shōnan agieren.

Weil sie beide die politische Selbstständigkeit Japans gegenüber den europäischen Staaten zu erhalten versuchten, bemühten sie sich, einen Bürgerkrieg zu vermeiden. Also verlangten sie die friedliche Übertragung der Souveränität vom „Shogun“ auf den „Tenno“. Aber ihre Ansichten über die entsprechenden Maßnahmen im Fall des Misserfolgs der friedlichen Übertragung waren verschieden. Shōnan war gegen eine Revolution mit militärischer Macht. Im Gegenteil dazu war Ryōma für diese Maßnahme.

## はじめに

横井小楠は、1809年肥後藩士の次男として生まれ、幼い頃より日中の歴史や儒学特に朱子学を学び、1858年に越前藩主で公武合体派の有力な大名であった松平春嶽（慶永）に招かれて、春嶽のブレーンになった人物である。小楠は、春嶽が1862年政事総裁職になってからは、一時幕政をも動かし、参勤交代を緩和するなどその改革に貢献したが、越前藩内における改革派の政治的退潮と共に失脚した。明治維新後、大久保利通、後藤象二郎らと共に大臣格の「参与」として明治政府の中枢に参画した（1869年没）。

この小楠が書き残した書簡は山崎正董編『横井小楠遺稿』（1942年刊）に収められているが、それを読むと坂本龍馬の名前が散見する。

龍馬は、1835年に土佐藩郷士の家に次男として生まれ、剣術修行のため2回江戸に赴いた後、1862年3月土佐藩を脱藩した。脱藩後、彼は、長州、九州、大坂を経て江戸に下った。大坂では同年7月23日に土佐藩士樋口武（真吉）に会っている<sup>1)</sup>。龍馬が江戸に戻った正確な時期は不明だが、同年の閏8月下旬には江戸に居たことを示す史料が残っているので、8月か閏8月に江戸に着いたと考えられる。春嶽の回想によれば、その年の7月か8月龍馬と土佐藩士岡本健三郎が越前藩邸を訪れたので、面会した後、側用人の中根雪江に話を聞かせた。その後、春嶽は改めて二人に会い勝海舟と小楠に対する紹介状を書いてやった<sup>2)</sup>。この回想は25年も後のもので特に時期は正確でないかも知れない。時期は別としてそれに従えば、龍馬は、1862年8月から江戸を離れる12月中旬にまでの時期に、小楠に初めて面会した可能

1) 樋口武『遺倦録』（岩崎英重編『維新日乗纂輯一』所収、日本史籍協会1925年）、161頁。

2) 平尾道雄監修、宮地佐一郎編、『坂本龍馬全集』、光風社書店、1978年、565頁。龍馬の献策、書簡および伝記的事実については、この文献の他に次の文献に依拠している。宮地佐一郎『龍馬の手紙』（講談社学術文庫）、講談社、2003年。また、横井小楠の献策、詩文、書簡および伝記的事実については、主として次の二文献に依拠している。山崎正董『横井小楠遺稿』日新書院、1942年。同著者『横井小楠伝 上、中、下巻』日新書院、1942年。なお、龍馬が小楠、海舟に会った経緯については、次の文献も参照した。ただし、その経緯や時期については、史家の間で見解の相違がある。前掲『横井小楠伝 中巻』、274、275頁。池田敬正『坂本龍馬』（中公新書）、中央公論新社、1965年、65-67頁。松浦玲『勝海舟』（中公新書）、中央公論新社、1968年、96-97頁。飛鳥井雅道『坂本龍馬』、平凡社、1975年、150-160頁。堤克彦「坂本龍馬と横井小楠—その出会いと訣別」（『共同研究・坂本龍馬』所収、新人物往来社、1999年）、46-60頁。龍馬の面会の順序としては、春嶽→小楠→海舟という飛鳥井氏の説に説得力がある。しかし、龍馬が江戸で小楠に会った正確な時期は不明である。龍馬はその年の12月中旬、江戸を離れ、京都を経て兵庫に来ていた海舟の許を訪れている。一方、小楠は12月19日の「士道忘却事件」後、身の安全の為に同月22日に江戸を立ち福井に赴いた。従って龍馬が小楠に初めて会ったのは、1862年8月から12月中旬までの間だと推定される。

性がある。

同じ時期に海舟にも会って弟子にしてもらった龍馬は、神戸海軍操練所創設のために海舟を助けて奔走した。幕臣だけでなく全国の藩士から募集される海軍の構想は、日本の統一と独立維持のための橋頭堡として海舟、小楠、龍馬が共有し推進しようとしていたものである。この三人は日本の内乱をできるだけ防ぎ平和裏に幕藩体制を変革するために協力し合った。

本稿は、小楠と龍馬の共通性と異質性を、社会的立場、思想、行動の三つの側面から明らかにし、この二人がどのような日本を構想し、どのようにしてその構想を実現しようとしたのかを考察する試みである。

## 第1章 小楠と龍馬——その出会いと別れ

本章では、龍馬と小楠の政治的な動きを踏まえつつ、両者が初めて出会ったと考えられる1862年から1865年の最後の会見にいたるまでの出会いのあらましを描いておこう。

まず、最初の会見について。龍馬は、前述のように1862年3月に土佐藩を脱藩、閏8月下旬には江戸にいた。小楠はすでに同年6月春嶽の要請により江戸に赴き、7月に政事総裁職となった春嶽を助けて、幕政改革を推進しようとしていた。同月小楠は幕府に対し『国是七条』を建言し、将軍の上洛と朝廷への謝罪、参勤交代の廃止、人材の登用、公論による政治、海軍の創設などを提案している<sup>3)</sup>。

春嶽の回想によれば、そのような折、龍馬は春嶽に面会し、小楠を紹介してもらった。龍馬と小楠の会見の正確な時期や詳細は不明だが、春嶽は「当時横井廢帝論家の評判を受く。両士（龍馬と岡本健三郎—筆者注）横井の談話するの忠実に頗る感佩せりと云ふ」と書いている。当時小楠は、皇位の世襲を批判する、勤王の志のない危険な人物という評判が立っていた。長州藩の木戸孝允（桂小五郎）は、同年9月4日越前藩邸に出向いて、横井を刺殺すべきだという「壮年の輩」<sup>4)</sup>がいるので外出させないようにと忠告している。龍馬が小楠とどのような話をしたかは分かっていないが、廢帝論者かどうかを確かめる質問をした可能性はありそうである。

ところで、1862年の8月から12月中旬までの間に、龍馬は当時軍艦奉行並という役職にあった勝海舟にも会って、世界情勢に目を開かれた。また翌年龍馬は、小楠の賛同者で、幕臣ながら日本の挙国体制樹立のために幕府の大政奉還を主張していた大久保一翁（忠寛）にも会い、その主張に感銘を受けている。一翁も、龍馬を、命を惜しまず国のことを考える「真

---

3) 前掲『横井小楠遺稿』、97-98頁。

4) 日本史籍協会編『続再夢紀事一』[復刻版]、東京大学出版会、1988年、75-76頁。

の大丈夫<sup>5)</sup>と高く評価した。

海舟の弟子になった龍馬は、1863年5月、神戸海軍操練所設立の費用を援助してもらうために、当時福井に帰っていた春嶽を訪ねた。福井滞在中、龍馬は小楠にも会っている。

越前藩士由利公正（三岡八郎）の談話によれば、その頃遅く帰宅した彼のもとに、夜半に小楠と龍馬が訪ねてきて、三人で炉を抱えて飲み始め、龍馬が感極まって「君がため、捨つる命は惜しまねど、心にかかる国の行末」という歌を吟じた<sup>6)</sup>。こうして龍馬は由利と知り合った。当時、由利は小楠の思想に同調し、彼の下で藩営の商社を運営して巨額の利益を上げていた<sup>7)</sup>。

その頃小楠は、いわゆる挙藩上洛計画を立案し、越前藩士を説得していた。この計画は、越前藩が前藩主松平春嶽と現藩主松平茂昭父子を擁し藩兵四千名を率いて大挙上京し、国政の主導権を握って、将軍、関白、諸大名臨席の下で日本の代表が外国の公使と談判する「国際会議」を開催させ国論を統一するというものである<sup>8)</sup>。龍馬が福井を訪れたのはそのような時期だった。

この計画は、国際会議の中で開国か鎖国かを最終的に確定して西洋諸国に対しようとするものである。小楠は、たとえ日本が一旦鎖国に戻ることになり、欧米諸国に対して本国への外交官や居留民の帰還を条理を尽くして要請しても、欧米がこれに従わず、ついに彼らと交戦することになった場合でも、そのような手順を踏んでおけば「理」は日本にあると考えていた。ここでは、国内が分裂したまま「大義」もないのに欧米諸国と戦争になるという最悪の悲劇をできる限り回避することに主眼が置かれている。

5月24日の城中大評定で、この挙藩上洛計画が決定されると、越前藩は肥後藩や薩摩藩に共同行動をもちかけ、同時に京都の様子を探らせた<sup>9)</sup>。

しかしこの計画は、京都の不穏な情勢や他藩の非協力の情報がもたらされて、越前藩内部

---

5) 前掲『坂本龍馬全集』, 568-570頁。松岡英夫『大久保一翁 最後の幕臣』(中公新書), 中央公論社, 1979年, 109-128頁。

6) 同書, 725-732頁。

7) 三上一夫『公武合体論の研究』[改訂版], お茶の水書房, 1990年, 75-81頁, 92-94頁。

8) 前掲『横井小楠遺稿』, 415-424頁。挙藩上洛論については、松浦玲『横井小楠 儒教的正義とは何か』[増補版], 朝日新聞社, 2002年, 221-228頁, 及び前掲『公武合体論の研究』[改訂版], 134-151頁を参考にした。

9) 近年福井で発見された越前藩士村田氏寿宛の龍馬の書簡について、小美濃清明氏は1863年7月8日のものと推定している。その書状の中で龍馬は、その日の夜伏見で小楠と落ち合う約束をしているので、もし小美濃氏の考証どおりであれば、7月8日の夜、龍馬が小楠に会った可能性がある。しかし小楠側の史料には、小楠が1863年7月に伏見に行ったという記録はなく、その考証が正しいかどうか分からない。前掲『龍馬の手紙』, 89-94頁参照。

で慎重論が台頭したため、小楠の努力も空しく7月23日に中止になった。そのため小楠は、8月越前藩を辞し肥後に帰っている。

肥後に戻った小楠は、いわゆる「士道忘却事件」の責任を問われて、知行を召し上げられ、士席を剥奪されて沼山津に蟄居した。この事件は、小楠がまだ江戸にいた前年1862年の12月肥後藩士と会っていたとき、刺客に襲われ、自分一人で佩刀を取りに藩邸に戻っている間に、残る二名が刀を持たないまま戦って重傷を負ったというものである<sup>10)</sup>。この事件による処分を受けて浪人となった小楠は沼山津で再び門人達と講学の日々を過ごすことになった。

その後の国内情勢を一瞥すると、1863年8月18日、薩摩藩、会津藩、宮廷内部の公武合体派公卿らの画策によって尊攘派追放のクーデターが断行された。その結果、尊攘派の公卿と真木和泉らは、長州藩と共に京都を追われた。同年9月末から12月にかけて薩摩藩の島津久光、越前藩の松平春嶽、土佐藩の山内豊信、宇和島藩の伊達宗城らが上京し、一橋慶喜や京都守護職松平容保と共に朝廷から「参預」に任命された。こうして公武合体が形の上では実現したかに見えたが、横浜鎖港問題や長州藩問題で意見が合わず、1864年3月には解体してしまった。

龍馬はその間海軍操練所の運営に尽力していたが、英米仏蘭四ヶ国連合艦隊が長州を攻撃しそうな状況の中で、日本の前途と国内の分裂状態を憂えていた。1864年2月14日龍馬は、イギリス、オランダとの交渉のために長崎出張を命じられた海舟に随って船で同地に向かった。一行は、佐賀関から陸路で熊本を目指し2月19日熊本城下に入った<sup>11)</sup>。この日龍馬は海舟に頼まれて小楠の許を訪れ、海舟に託された「金子」を渡し時事についての情報を知らせている。海舟は知行を召し上げられた小楠のために金銭的な援助を行ったのである。

龍馬は、海舟とともに熊本から船で長崎に渡った。海舟が長崎でイギリス、オランダと交渉している間、小楠はたびたび門人を海舟の許に遣って伝言を伝えさせている。

4月4日、海舟は帰路に就き、4月6日には再び小楠の許に龍馬を遣わした。小楠はその二日前にしたためた手紙の中で、亡兄の二人の息子（横井左平太、大平兄弟）と肥後藩士岩男内蔵允を海軍操練所に入れることを海舟に依頼している<sup>12)</sup>。龍馬は小楠から託されたこの三人の肥後藩士を伴って、海舟一行に合流し大坂に向かった<sup>13)</sup>。

1862年11月以来、小楠は海舟に開国鎖国の論争に囚われず海軍の事業に専念すれば、道は

10) 「士道忘却事件」の処分の経緯については、前掲『横井小楠伝 中巻』、285-299頁に詳しい。

11) 前掲『坂本龍馬全集』、920頁。前掲『横井小楠伝 下巻』、39-40頁。

12) 前掲『坂本龍馬全集』、920頁。前掲『横井小楠遺稿』、441-442頁。

13) この時の海舟と龍馬の行程については、『海舟日記』(勝部真長他編『勝海舟全集18』、勁草書房、1972年)、155、164頁も参考にした。

開けると説いていた<sup>14)</sup>。小楠はまた、海軍の費用をどう捻出するかについての案『海軍問答書』を長崎滞在中の海舟に書き送ってもいる<sup>15)</sup>。この時期、海舟、小楠、龍馬の三人が海軍の必要性という点で一致し、緊密に結びついていたことが分かる。

大坂に帰った龍馬は、1864年8月中旬京都で海舟の使者として西郷隆盛に面会した。9月には海舟自身も隆盛に会っている。10月には幕府より海舟に対して江戸への召還命令が下り、翌1865年3月には神戸海軍操練所も閉鎖された。以来龍馬は、薩摩藩の庇護を受けつつ活動を続けた<sup>16)</sup>。

龍馬は1864年10月以来、江戸、大坂、京都に潜伏して、土佐勤王党の同志らと連絡をとりあっていたが、1865年4月、薩摩船で西郷や小松帯刀（薩摩藩家老）らと共に大坂を出発して鹿児島に向かった。彼は鹿児島に16日間滞在した後、5月16日鹿児島を発ち、陸路肥後を目指し再び小楠の塾を訪れている。これが二人の最後の出会いであった。

龍馬は小楠の許を辞して、大宰府を経て下関に向かい、土佐藩出身の脱藩浪人中岡慎太郎らと共にいわゆる薩長同盟の斡旋に奔走し始める。こうして小楠や海舟が歴史の舞台から一時退くのと入れ替わるように龍馬が表舞台に上がったのである。

以上が、史料によって推定できる小楠と龍馬の出会いの概要である。次章では、二人の社会的立場を比較しておこう。

## 第2章 社会的立場の共通点と相違点

本章では、次章で小楠と龍馬の思想と行動を比較する前に、二人が置かれていた社会的立場を比較しておきたい。

小楠は、代々武士の家系で150石取りの藩士の次男に生まれた。小楠の父横井大平は、奉行副役、物頭、火廻り並盗賊改などを歴任した士分格の有能な武士だった。兄の横井左平太も各地の郡代や天主方支配頭などを務めた<sup>17)</sup>（前述した小楠の二人の甥は祖父と父の名を名乗っている）。

龍馬は、土佐藩の郷士の次男である<sup>18)</sup>。土佐藩の郷士制度は、旧領主長宗我部氏の遺臣を士分格の家臣（上士）と農民の間の郷士身分に取り立てたのが始まりで、その後、商人もその財力によって様々な方法で郷士になれるようになった<sup>19)</sup>。土佐藩の郷士は、足軽など軽格

---

14) 前掲『横井小楠遺稿』、438-439頁。

15) 同書、19-29頁。

16) 前掲池田敬正『坂本龍馬』、104-106、108-114頁参照。

17) 同書、346-347頁。

18) 前掲池田敬正『坂本龍馬』、12-15頁。

19) 土佐藩の郷士制度については、平尾道雄『土佐藩』、吉川弘文堂、1965年、41-48頁、土居晴夫

の武士層（下士）に属する。初代坂本家は、高知城下で商家として成功した才谷屋の三代目八郎兵衛直益の長男八平直海が分家して郷士になった家である。坂本家は161石8斗4升の領地と10石4斗の禄があった。商家の方は三代目の次男八郎右衛門直清が継いだ。龍馬の生家が商家の町にあることが象徴するように、坂本家は商人と武士の「境界」に位置していた。

このように小楠が士分格の武士出身、龍馬が軽格の郷士出身という違いはあるものの、両者とも次男という同じ境遇にあった。すなわち、長男とは違って、己れの才覚に頼って生きてゆかねばならない身分である。そのため小楠は幼い頃より学問と武術に精励し、龍馬は周知のように剣術に励んでいる。

また、藩内での立場を比較すると、小楠は龍馬より出世の可能な位置にあったと思われるが、その改革思想が災いして藩の旧守派から疎まれたため、江戸遊学途中での帰藩を命じられ、それ以降、藩内では不遇だった。

龍馬の場合、郷士の次男という社会的出自のため、藩内での栄達は難しかったと思われる。それどころか、軽格の武士に対する士格の武士による身分的差別は激しく、軽格の武士がその政治的信条を藩内で実現することは困難だった。土佐藩において軽格の武士の中から脱藩してその志を遂げようとする者が続出したのは、そのような事情によっており、龍馬も例外ではなかった。

以上のように二人は、その社会的境遇は異なるものの共に武士として育ち、後に志士として活動したが、同時に経営者としての一面も持ち合わせていた。

まず小楠は、欧米の積極的な通商政策にヒントを得て、日本国内で殖産興業を推進し、その産物を輸出にまわすという貿易立国を構想していた<sup>20)</sup>。実際、彼は越前藩で由利公正を使って、1859年藩営の商社（「物産総会所」）を設立して越前の生糸を外国に売り、巨額の利益を挙げている。これは由利の理財能力による所も大きいと考えられるが、小楠自身も経営に深く関わっていた。龍馬は小楠や由利からこの商社のことを聞いたかもしれない。

次に龍馬には、前述のように商人の血が流れていた。彼は、亀山社中（後に土佐藩に公認されて海援隊となる）という民間会社を設立し、同志と共に海運業仲介取引を行った。1867年に海援隊士陸奥宗光に宛てた手紙を読むと、彼がその頃海運業をさらに発展させようと考えていたことが分かる<sup>21)</sup>。陸奥は長崎を本拠地として、日本各地に支店を置く一大商社の構想を龍馬に示していた。

また、龍馬は、孤立した長州藩のために薩摩藩との間を周旋し、長州藩が武器を薩摩藩の

---

「郷土坂本家—初代直海伝」（前掲『共同研究・坂本龍馬』）を参照した。

20) 前掲『横井小楠遺稿』、29-41頁。

21) 前掲『坂本龍馬全集』、327-330、390、521-523頁。前掲『龍馬の手紙』、499-502、583-587頁。

名義で購入する便宜をはかったり、西郷が薩摩藩兵の糧米を下関で購入できるようにしたりして、両藩を和解に導いていった。彼は経済的協力を通じて両藩を接近させたのである。

このように、小楠と龍馬はどちらも通商の重要性に気づいて、実際に経営者としても活動していた。二人は武士と商人の両面性をもっていたのである。

### 第3章 思想と行動における共通点と相違点

本章では、小楠と龍馬の思想と行動を比較して、その共通点と相違点を明らかにしたい。信念に基づいて行動した二人の思想と行動は深く関連しあっているが、ここでは便宜上、はじめに、両者の政治思想と世界情勢に対する認識を、次いで大政奉還と討幕という現実の政治に対する態度と行動を比較してみよう。

まず、二人の政治思想と世界情勢論について。

小楠は、若い頃より水戸学の書物に親しみ、欧米諸国の脅威と日本の独立の維持を訴える水戸学を高く評価していた。ところが1853年ペリーが来航した時、前水戸藩主徳川斉昭が従来の水戸学の立場を捨てて懐柔策を取り、事態を一身で引き受ける覚悟がないことを知ると、小楠は深く失望し、水戸学それ自体に疑問を感じるようになった。彼は、目先の政治的結果に囚われる水戸学の功利的傾向を批判し<sup>22)</sup>、さらに後には、天皇を崇拜して幕府に反乱を起こすというような、君臣関係を見捨てた水戸藩士の行動を根拠にして水戸学における神道の弊害を指摘した<sup>23)</sup>。

小楠はペリー来航後も攘夷論の立場に立っていたが、1855年、中国で出版された世界地理書『海国図志』の翻刻版などによって西洋文明を集中的に学んだ結果、攘夷論から開国論に転じた。彼は、水戸学のように天皇の下にある日本が世界の中心であり、欧米は周辺の夷人に過ぎないというような「中華思想」から解放され、今や民衆本位の政治を行う欧米こそが「中華」であって、それに逆行するような日本や中国は愚かな国に成り下がっている、とまで発言するようになる<sup>24)</sup>。小楠にとって「民を安んじること」、すなわち民衆が豊かで平和な生活を送れるようにすることが、政治の最高原則であり、すべての判断基準だった。

小楠は、日本の独立を維持するには、世界の中に日本を置いて針路を定めていく必要があると考えていた。「個」の方針は「全体」の中において明らかになるというのである<sup>25)</sup>。

彼が1860年代に把握した世界情勢は、次のようなものであった。蒸気船の発達によって世

---

22) 前掲『横井小楠遺稿』、220-221、227、229-230頁。

23) 同書、902、910頁。

24) 村田氏寿『関西巡回記』、三秀舎、1940年、35頁。

25) 前掲『横井小楠遺稿』、32頁。



界は一つになっており、国際貿易により国を富ますことが重要である。欧米諸国は、それぞれの国家利害を追求し、いつ戦争が起きても不思議ではない<sup>26)</sup>。そうなれば日本もその巻き添えになる恐れがある。近代戦は従来の戦争より、規模が大きく激烈でその被害は悲惨である<sup>27)</sup>。

このような認識の上に立って小楠は、日本は内戦を回避し国内の意思統一を果たして、欧米諸国との交渉に臨むべきであると主張した。そのためには、朝廷と幕府の和解、公論による政治が不可欠であるだけでなく、さらに国力を高めるため、参勤交代の廃止、海軍の創設、管理貿易などを実行しなければならない、と彼は考えた。

近代戦の被害の大きさを熟知していた小楠は、前述したように1863年日本と欧米諸国の間の緊張が、外国人殺傷事件、長州藩による外国船砲撃事件、薩英戦争などによって高まる中で、越前藩の拳藩上洛を唱え、越前藩主導の国際会議による国論の統一と戦争回避を画策した。小楠は基本的には平和主義者ではあるが、単に戦わないというのではなく、日本が軍事力、経済力を高め、その力を背景に国際社会において儒教的仁義を確立するという構想もっていた<sup>28)</sup>。儒教的仁義は国際社会においても十分通用し、それによって欧米諸国の国家的エゴイズムを克服できるというのが、原理主義的ともいえる儒教徒であった小楠の信念であった。

龍馬も小楠と同じく、日本の独立の維持を希求した。龍馬の書いた次の手紙には、彼の危機感が現れている<sup>29)</sup>。

「…誠になげくべき事はながとの国に軍初<sup>いくさ</sup>り、後月より六度の戦に日本甚利すくなく、あきれはてたる事は、其長州でたゝかいたる船を江戸でしふく（修復）いたし又長州でたゝかい申候。是皆姦吏の夷人と内通いたし候ものにて候。右の姦吏などはよほど勢もこれあり、大勢にて候へども、龍馬二三家の大名とやくそくをかたくし、同志をつのり、朝廷よりも先ず神州をたもつ<sup>いくさ</sup>の大本をたて、夫より江戸の同志と心を合せ、右申所の姦吏を一事に軍いたし打殺、日本を今一度せんたくいたし申候事にいたすべくとの神願にて候」(1863年6月29日付坂本乙女宛)。

引用文中の長門の戦とは、1863年5月10日に長州藩が、下関沖合を通過したアメリカ商船

26) 前掲『横井小楠遺稿』, 19, 24, 443-44, 908-909頁。

27) 注24) の文献の同じ箇所を参照。

28) 前掲『横井小楠遺稿』, 11-14, 23, 910-911, 926頁。

29) 前掲『龍馬の手紙』, 76-78頁。

を砲撃し、さらに23日にフランス軍艦、26日にオランダ軍艦までも攻撃した事件を指している。龍馬は、幕府が外国船の修復を援助していることに憤り、「神州をたもつ」ために、幕吏を一網打尽にして日本を「せんたく」したいと述べている。

この手紙を書いた日に龍馬は、京都の越前藩邸に村田氏寿（藩主春嶽に小楠を推薦した越前藩士）を訪ねて、このままでは長州藩が外国に占領されてしまうという危機感をあらわにし、座視することなく直ちに行動を起こし、江戸の守旧的な幕吏を退けるべきであると迫っている<sup>30)</sup>。龍馬が日本を守るという意識のない幕府官僚に憤慨していたことが分かる。

日本の国土を保全し、独立を維持しようと活動していた龍馬の前掲書状で注目されるのは、「朝廷よりも先ず神州をたもつの大本」という言葉である<sup>31)</sup>。彼にとって一番重要なのは「神州をたもつこと」であり、朝廷尊崇はその次に来るものだった。

龍馬の世界認識がどのようなものであったかを直接知ることの出来る史料は現在のところ残っていない。彼は、海舟、小楠、大久保一翁などから海外知識を吸収したと考えられる。また彼の周りには、長岡謙吉や陸奥宗光など海外事情に明るい若い海援隊士がいた。さらに龍馬は、『万国公法』という国際法の本を読み、海援隊が大洲藩からチャーターした、いろは丸が紀州藩の船と衝突、沈没した事件の交渉に役立てている<sup>32)</sup>。このように海外については書物や伝聞によってかなりのことを知っていたらと推測される。

龍馬は、1867年5月5日、長府藩士三吉慎蔵宛の書簡の中で「…国を開くの道は、戦するものは戦ひ、修行するものは修行し、商法は商法で名、かへり見ずやらねば相成らず」と述べて、海援隊士が各自の道に打ち込めるように努力したいという決意を明らかにしている<sup>33)</sup>。当時、龍馬は次の時代を担う青年の教育を重要視して、その一端として青年による北海道開拓計画も構想していた<sup>34)</sup>。

龍馬は小楠からも影響を受けたので、両者には共通点が多い。海軍の重要性に対する認識、海外貿易の推進などは、すべて日本の独立の維持を目指してのことである。この目的のために、両者とも内戦を回避し、国内の意思を統一することが緊急事項であると考えていた。また二人ともこれらを実施する際の方法論として、公論による政治を主張していた。小楠は1862年7月に幕府に進言した『国是七条』の中で、「大いに言路を開き、天下と公共の政を

30) 日本史籍協会編『続再夢紀事二』[復刻版]、東京大学出版会、1988年、62-65頁。

31) なお、1863年6月16日付池内蔵太の母宛の手紙では、「朝廷というものは国よりも父母よりも大事にせんらんといはきまりものなり」と書いているが、これは池内蔵太の脱藩を弁護するためのものであり、本文中の手紙の内容と矛盾するものではない。前掲『龍馬の手紙』、70頁。

32) 前掲『龍馬の手紙』、348-349頁。

33) 同書、338頁。

34) 同書、308、522頁。

為せ」と書いているし、龍馬も1867年6月に後藤象二郎と共に起草した『船中八条』の中で「上下議政局を設け、議員を置いて万機を参賛せしめ、万機宜しく公議に決すべき事」としている<sup>35)</sup>。

次に、大政奉還と討幕運動に対する二人の態度を比較してみよう。

まず、龍馬はこれについて次のような行動の軌跡を見せている。1864年10月海舟に江戸への召還命令が下り、翌月海舟が海軍奉行を罷免されて、神戸海軍操練所の事業が頓挫すると、龍馬は薩摩藩に身を寄せた。彼は、幕府による長州再征の情報を受けて、翌1865年5月以降、中岡慎太郎と協力して、薩長の和解を周旋した。龍馬は、1863年5月の長州藩による外国船砲撃事件にも同情的であり、長州藩が孤立して滅亡しないように方策を講じたのである。薩長同盟は、1866年1月22日、紆余曲折の末成立した<sup>36)</sup>。

1866年6月には、幕府側の攻撃（第二次征長の役）が始まり、龍馬は長州藩に味方して戦争に参加した。8月1日には小倉城が陥落し、21日には征長停止の勅が下り、9月2日には休戦が協定された。この戦争に参加し双方の戦ぶりを見たことは恐らく龍馬にとって大きな転機となった。龍馬は8月16日付長府藩士三吉慎蔵への手紙の中で、「幕のたおれ候は近にあるべく存じ奉り候」と、幕府の滅亡が間近であると予測している<sup>37)</sup>。

龍馬は、同年8月下旬に越前藩士下山尚に長崎で面会したときには、幕府はもはや見込みがなく大政奉還しか途がない、松平春嶽公は幕府に対してそのように進言すべきだと下山に説いている<sup>38)</sup>。客観的にみれば、当時彼は、薩長側に完全について武力討幕を目指すか、まず大政奉還を推進するかという岐路に立っていたが、後者の道を選択したことになる。ここには、直接には大久保一翁の大政奉還論の影響を見て取ることができるが<sup>39)</sup>、さらに言えば、国論を統一して内乱を防ぎ、日本の独立を維持して行こうという、海舟、一翁、小楠、春嶽に共有されていた思想が龍馬に受け継がれていたことが分かる。

---

35) 前掲『横井小楠遺稿』、98頁。前掲『龍馬の手紙』588頁。

36) 薩長同盟から戊辰戦争までの歴史については、遠山茂樹『明治維新』（岩波現代文庫）、岩波書店、2000年（初版は1951年）を参照した。この文献は薩摩藩や長州藩の動きを次のように描いている。薩摩藩や長州藩も武力による討幕の覚悟を決めてその準備を進めていたが、いわば「保険」代わりに大政奉還の工作を容認していた。木戸孝允は、こうした大政奉還及び討幕を一つの「大芝居」と見て、最後には戦があるものと予測していた。また薩摩藩は土佐藩を討幕に引きこむには、大政奉還の工作に深入りさせるのがよいと判断していた。龍馬の考えた筋書きと、薩摩藩、長州藩、中岡慎太郎のそれとは異なっていた。中岡慎太郎については、井上清「明治維新と中岡慎太郎—坂本龍馬とくらべて」（『井上清史論集1 明治維新』岩波現代文庫、岩波書店、2003年）を参考にした。

37) 前掲『龍馬の手紙』、217頁。

38) 前掲『坂本龍馬全集』、665頁。

39) 同書、863頁。

龍馬の大政奉還論は、開成館を創設して藩の殖産興業、富国強兵を推進していた土佐藩の新しいリーダー後藤象二郎と1867年1月に知り合ったことで、具体化していった。同年6月には薩摩藩と土佐藩との間に薩土盟約が結ばれ、両藩は王政復古と大政奉還のために協力し合うことを約束した<sup>40)</sup>。龍馬もその盟約の場に陪席していた。10月には、後藤と龍馬の努力が実って、土佐藩主松平容堂（山内豊信）の名前で大政奉還の建白書が幕府に上申され、10月14日徳川慶喜は政権奉還を朝廷に奏聞して認められた<sup>41)</sup>。

龍馬はその後、新政府の組織作りをしたり、財政基盤創出のアドバイスを求めに越前に由利公正を訪ねたりしていたが、11月15日に暗殺された。

さて、小楠は前述した挙藩上洛策に見られるように、国論を統一して内乱を回避することに腐心していた。また、大政奉還論については、1862年10月20日一翁からその説を聞いたとき、彼は「深く其卓見に感服して其上の処置はあるべからずと答えた」と伝えられている<sup>42)</sup>。翌1863年2月に書かれた幕府に対する建白書の中では、攘夷実行が不可能であることを天皇に説いて、天皇がどうしても受け入れなければ幕府は大権を返上せよと迫っており、小楠が一翁の説を採用していたことが分かる<sup>43)</sup>。さらに、1866年越前藩士下山尚が龍馬に会った後に熊本の小楠を訪ねたときも、春嶽が将軍に大政奉還を進言すべきだという、下山から聞いた龍馬の意見に賛成している<sup>44)</sup>。以上のように小楠も大政奉還論の立場であったが、これは、天皇の下に有力諸侯及び各藩の人材が集まって公論を形成するという小楠の構想、さらに彼が中国から受容した、権力の禪譲を理想とする堯舜思想からも容易に受け入れられるものだった。

龍馬も小楠もこのように大政奉還によって内乱を回避するという点では一致していた。しかし、大政奉還が実現しなかった場合、武力による討幕を肯定するかどうかでは、二人の考え方は食い違っていた。龍馬はその場合武力に訴えることはやむを得ないと考えて行動したのに対し、小楠にとって武力討幕はもっての他であった。

龍馬は大政奉還の実現に尽力しつつ、幕府との戦争に備えて、長州藩、長府藩、薩摩藩、土佐藩の軍艦からなる連合艦隊の編成を提唱したり<sup>45)</sup>、長州藩や土佐藩に軍艦や銃の斡旋をしていた。

他方、小楠は肥後藩に対する家康以来の幕府の恩顧に言及したり、天皇を崇拜するあまり

---

40) 同書、528頁。

41) 前掲『龍馬の手紙』、481-486頁。

42) 前掲『続再夢紀事一』、565頁。

43) 前掲『横井小楠遺稿』、99-100頁。

44) 前掲『坂本龍馬全集』、666頁。

45) 前掲『龍馬の手紙』、425頁。

幕府に叛旗を翻した水戸藩士や長州藩士を君臣関係を乱す者として批難していることからして<sup>46)</sup>、武力による討幕を肯定したとは考えられない。この点では、薩摩に接近し長州を救うため薩長同盟を進めようとした龍馬は小楠と意見が対立していた。

特に、長州藩をどうするかについて二人の見解は全く異なっていた。龍馬はもともと長州藩に同情的であり、長州を救うために薩長同盟を画策し、さらに第二次征長の役では実際の戦闘においてこの藩に味方している。

これに対して小楠は、長州藩に批判的であり、幕府による2回の征長戦争のどちらも支持していたが、第二次征長の役における長州藩の勝利を知って、同藩の実力を悟っている<sup>47)</sup>。彼は、このままでは幕府は滅亡すると考え、春嶽に対して、幕府が反省し、国を誤らせた責任者を罷免して、天下列藩と共に公共の政道を行うべきだと力説した<sup>48)</sup>。また、1866年8月3日付の海舟宛の書簡では、「天意何にか在るや恐る可し懼る可し」と書き、「急流底中の柱」<sup>49)</sup>として春嶽に期待している。この時期小楠と海舟が幕府方の敗北に衝撃を受けつつ深く恐れたのは、内乱が拡大していくことであった。

小楠はその後も幕府の動向に注意を怠らず、将軍徳川慶喜による西洋化政策をある程度評価しつつも、天下に人が無いかのようにに振舞う慶喜の態度に「驕慢の病」<sup>50)</sup>を見て取り、そこには真の治道の精神が欠けていると指摘している。彼が心配したのは、このまま各藩が割拠体制に入り、西洋諸国と個別に接触することによって西洋諸国の思うがままになることだった<sup>51)</sup>。

小楠は肥後にあっても幕府、朝廷、諸藩の情報をできるだけ集めていたが、関連の書簡を見る限りでは、薩摩藩と長州藩における討幕の動きに関してはほとんどつかんでいなかった。これに対して龍馬は、薩長の有力者に同志も多く、実際にそれぞれの藩状を見聞きしているので圧倒的に情報量が多かった。少なくとも龍馬が第二次征長の役に参戦した1866年以降は、彼の方が小楠より当時の日本の全体的状況を把握しやすい位置にいたと思われる。

以上のように、小楠と龍馬は内戦を回避し、朝廷の下に議会を創設して国家の意志統一と公論による政治を実現し、日本の独立を維持しようとする点で、同じ政治的立場に立っていた。両者の大政奉還論は、直接には大久保一翁の影響によるが、そのような共通の政治的立場にも適合するものであった。但し、武力による討幕とそれに関連する長州藩に対する態度

---

46) 前掲『横井小楠遺稿』, 205, 910頁。

47) 同書, 477頁。

48) 同書, 478-479頁。

49) 同書, 472-476頁。

50) 同書, 506頁。

51) 同書, 511頁。

は異なっていた。小楠が長州藩の滅亡もやむを得ないと考え、武力討幕を端から問題にしなかったのに対し、龍馬は同藩を窮地から救い出そうと努力し、大政奉還が成功しなかった場合に備えて、武力討幕の準備も進めていた。

#### 第4章 結語

最後に、それぞれの社会的立場を考慮しつつ、小楠と龍馬を全体として比較して本稿を締めくくりにしよう。

小楠は、士格に属する肥後藩士の次男に生まれ、優秀だったのでかなり出世できる可能性もあったが、過激な改革思想をもっていたために旧守派にいらまれ不遇だった。その後、越前藩主春嶽に見込まれて越前藩に出向した。小楠はそこで水を得た魚のように力を発揮して、越前藩の経済力を高め、春嶽が政事総裁職に就いてからは、一時期幕政改革にも大きな影響を及ぼすほどになった。彼は思想的には極めて柔軟で、藩、幕府の利害を越えて、世界の中の日本という視点から日本の独立を維持するための方策を次々に提案している。小楠は、権力の禪譲を重んじる儒教思想を信奉し、徳川家に恩のある肥後藩士であるという事実にと束縛されていた。彼が武力による討幕を支持しなかったのは、これによると思われる。

これに対して、龍馬は土佐藩の郷士の次男であり、厳格な身分制度のゆえに、彼の志を藩内で実現する見込みはほとんどなかったといえる。脱藩後、当時の先覚者に面会し、視野を広げ、勝海舟に見込まれて神戸海軍操練所の塾頭となった。操練所閉鎖後は、長崎で亀山社中という商社を立ち上げた。亀山社中は後に土佐藩に公認されて海援隊となり、日本各地で事業を展開しようとした。だが隊長である龍馬の暗殺により、その可能性は消えた。龍馬はこのように海運業に携わると共に、薩摩藩と長州藩、薩摩藩と土佐藩の同盟を仲介して、反幕勢力を結集した。彼は万が一の場合の武力行使にも備えつつ、後藤象二郎を動かして大政奉還を実現するに至った。

海運業も行っていた彼は、まず藩と藩を経済的に結びつけ、その土台の上に政治的同盟を確立していった。幕府は、藩の間の横断的連帯を嫌っていたから、龍馬は幕府にとって最大級に危険な人物であった。江戸時代には一国経済が成立し、商人は横断的に結びついていたが、龍馬はそれを政治の世界に持ち込んだのである。商人と武士という二つの側面を生まれながらに備えていた彼の面目躍如たる戦法だといえよう。

龍馬は、幼い頃から武士と商人の両方の世界に身を置き、成人してからは脱藩生活の中で多様な地域、多様な階層の人々と接触していた。龍馬の手紙は、家族や土佐藩の同志を始めとする武士だけでなく、後援者の商人、旅館の女将などにも宛てられており、しかも彼らとの間の深い信頼関係を感じさせるものが多い。「境界人」(マージナルマン)としての社会的

立場が龍馬に自由な発想と行動力をもたらしたと考えられる。彼はまた、民衆の世論の持つ力をよく知っており、前述のいろは丸事件の談判の際には、紀州藩に不利になるように「船を沈めた其償いは金を取らずに国を取る」という俗謡を流行らせたと言われている<sup>52)</sup>。

龍馬は、沸騰する幕末志士の民族意識に影響されつつ、一揆的行動を慎んで、時には「どろの中のすゝめ貝(蜆貝)」<sup>53)</sup>(龍馬の言葉)として地下に潜行しながら、冷めた目で時代の「潮時」を見極めて行動しようとした。

小楠があくまでも越前藩という幕末の雄藩を背景に活動したのに対して、脱藩した龍馬は後ろ盾なしのゼロからの出発であったが、そのフットワークと人間的魅力を十二分に活かして、当時の人傑を網羅したような一大人脈を築き上げた。

1866年2月、故郷の家族に宛てた手紙の中で、龍馬は、「天下の人物」<sup>54)</sup>として勝海舟、大久保一翁、由利公正、横井小楠、西郷隆盛、小松帯刀、木戸孝允、高杉晋作を挙げている。これらは皆、彼の人脈に属する人物であり、龍馬が幕末の群雄の多くと共に働き、彼らを結びつけていたことが分かる。脱藩浪人の龍馬が時代を動かすことができたのは、この人脈に拠っていた。

これらの人物のうち、海舟から小楠までは幕政改革派であり、西郷から高杉までは討幕派になった人々である。龍馬はこの二つの派の結び目に位置していた。彼は、海舟、一翁、小楠の下で思想を形成して、始めは神戸海軍操練所のために働き、操練所が幕府にいらまれて立ち行かなくなると、西郷、小松、木戸、高杉と行動を共にするようになる。そして龍馬は、土佐藩を動かして大政奉還を成立させた。もし、大政奉還が成功しなかった場合、幕末から明治初頭の内乱の規模ははるかに大きくなっていただろう。

小楠と龍馬は、最後の手段として武力討幕を肯定するかどうかという違いはあるものの、両者とも欧米列強の中での日本の独立維持という視点から、藩や幕府の利害を超越して、できうる限り平和裏に新たな国づくりを進めようとした。二人とも海軍の重要性を認識しているが、目指すところは平和主義的な通商国家であったと考えられる<sup>55)</sup>。何よりも、極めて流動的な政治情勢の中で柔軟かつ自由な発想をもつことができたのは、両者の根本的な共通点といえよう。

---

52) 前掲『龍馬の手紙』、356-357頁。

53) 同書、84、108-109頁。

54) 前掲『龍馬の手紙』、250頁。松浦玲氏の前掲『勝海舟』は、海舟と龍馬の関係や龍馬の行動の軌跡についても鮮やかに描いており、筆者も影響を受けた。

55) 龍馬は、小楠とは異なり通商政策については詳言していないが、商法を重んじている点、思想に對外膨張主義的な傾向がない点から判断して、平和主義的な通商国家を目指していたものと考えられる。